

○ 食べることの楽しみ、 食べられることの喜び

—— 正岡子規「仰臥漫録」
(1927年7月、岩波文庫) ほか ——

台東区根岸。山手線・鶯谷駅前の繁華街の喧騒を抜けた所に、正岡子規が早すぎる晩年を過ごした「子規庵」がほぼ当時の姿のまま残されています。

子規は、明治16(1883)年、16歳の時に上京して東京大学予備門に入学するも間もなく中退、俳句・短歌革新運動に没頭するようになります。しかし、何度か咯血し、更にはカリエスに侵され、ついには寝た切りの生活を強いられるようになります。この子規庵の「病床六尺」とそこから眺める庭の景色が、彼の世界の全てとなりました。

病床において子規は、多くの優れた随筆・日記文学を残します。その一つである「仰臥漫録」は他人に見せることを想定していない私的な日誌です。このため、より直接的に子規自身の思いが述べられ、また「写実派」の子規らしく、その記録は詳細で、かつ、悲惨なものです。

子規の病は次第に重篤となり、やがて自分では寝返りさえ打てなくなります。背中や腰の穴から膿が流れ出し、激痛に耐えられない時はひたすら「絶叫、号泣」するより他ない生活となります。母の八重と妹の律がつきっ切りで看病しますが、皆が留守にした一瞬、子規は苦しさの余り身近にあった小刀ときりを手に取ろうとさえします。

このような苦しみのなか、子規に残された唯一の楽しみは「うまい物を食ふ」ことでした。「仰臥漫録」には、日々の食事のメニューが丹念に記録されています。例えば、明治34年9月24日の献立は以下のようなものでした。

[朝] ご飯3碗、佃煮、奈良漬、牛乳ココア入り、餅菓子、塩せんべい
[昼] 粥3碗、かじきの刺身、芋、奈良漬
[間食] 餅菓子、牛乳ココア入り、ぼたもち、菓子パン、塩せんべい

[夕] 粥3碗、生鮭照焼、ふし豆、奈良漬、ぶどう

ほぼ毎日、このような食事が続きます。寝た切りの病人にしては大変な健たん家と言えるでしょう。壮大な子規の胃袋は、彼の残りわずかな生への強い執着を1人で背負うかのようです。司馬遼太郎は「坂の上の雲」のなかで、子規に「あしはもはやこの病から抜け出そうとは思わんとらんぞな。ただ、死ぬまで書き物をする体力が欲しいのじゃ」と言わせています。

また、高浜虚子ら弟子に対しても、子規は「御馳走を喰ふが第一」と勧めています。「富も名誉も一国の元気も、みな御馳走の中から湧き出る」ものであるから「座っていて頭脳を使う人は少量の食物から多量の滋養物を取るべし」とし、特に牛肉を始めとする肉類を推賞しています。

さて、その子規も明治35年に入ると胃腸が弱り、飲食の楽しみも奪われたと嘆くようになります。そして9月19日未明、月があくまで明るい夜、数え35歳で永眠します。遺骸は、当時滝野川村と呼ばれた田端の大竜寺に葬られました。

その大竜寺を訪れたのは、12月のある冬晴れの昼下がりでした。目新しい本堂の脇を抜けた墓地の片隅、簡素な墓石には「子規居士之墓」とのみ記されています。右脇にはそれを見守るように母・八重の墓石が、左脇には子規自身が生前に残した文章による墓誌銘が建てられています。日差しは暖かいものの、北風に背後の笹が騒がしく鳴る日でした。

(りえぞん No.10, 2001/12/26)